

バラの庭の思い出

戸谷 三郎 千葉県千葉市 六十九歳

私の散歩道にバラを育てるおじいさんがいました。庭に小屋を建て、休憩しながら作業をして、春と秋にはバラが咲き甘い香りに包まれました。通行人は深呼吸して「こんなに咲きましたね。それにとっても良い香り」おじいさんは嬉しそうにニコニコしていました。秋バラが咲き終わるころ、おじいさんの姿が見えなくなり冬になると落ち葉が積もり、散歩する人たちは「おじいさんどうしたのかな？病氣なのかな？」と心配そうに庭を見ていました。

冬もすぎ春バラの季節になると一人の女性がバラの世話や庭の掃除をしていました。近所の人で冬に入院したおじいさんの了解を得てバラのお世話をしているのです。そのうちに作業をする人は五人ほどに増えました。皆さん、散歩で立ち寄りお手伝いに参加した近所の人たちです。私も手伝いをしたくなり日曜大工が好きなので小屋の修繕や壁をきれいな緑に塗りました。また五月になり、バラが咲き始めるとおじいさんの家族がやってきて、おじいさんがなくなりこの庭は売却すると伝えました。皆さん悲しい気持ちになりましたが、ひとりが「バラの株をもらってもいいですか？」と聞き、ご家族の許可を得ました。皆さん、お気に入りの株を持ち帰り、私もひと株いただきました。翌年の五月、町内のあちこちでバラの甘い香りがあふれ、私の庭でも美しいバラが咲きました、私にはうれしそうなおじいさんの姿が目に見えびました。